

伝統祭礼の存続が移住定住に与える影響について - 地域の交流を生み出す伝統祭礼に着目して -

岩松ゼミ かきたま汁チーム

○金野 佑希乃 (KANENO Yukino)・瀬島 美友紀 (SEJIMA Miyuki)・高木 智也
(TAKAGI Tomoya)

(京都府立大学公共政策学部公共政策学科)

キーワード：伝統祭礼、移住定住

1. はじめに

1.1 研究の背景と問題意識

近年の日本社会において、農山村地域における少子高齢化と人口減少は深刻な問題となっており、地域社会の存続が危ぶまれている。地方の人口減少は、伝統祭礼の担い手不足を招き、文化消滅の危機を生んでいる。その解決策として移住定住による人口回復の促進があるが、その取組は必ずしも十分な成果を上げているわけではない。本研究では、伝統文化の維持・継承を実現することを通じて、いかに移住定住を促進できるかを考える。

1.2 先行研究の整理と本研究の位置付け

従来の移住定住政策は、主に経済的な支援や生活環境の整備といった目に見える要因に焦点を当てられてきた傾向がある。しかし、移住者が地域に長期的に定着するためには、これらの物理的な条件だけでなく、地域社会の受け入れの姿勢や人間関係の質といった目に見えない要因も必要ではないかと考える。本研究では、農業や伝統工芸といった日常的な生業とは異なり、年に一度の非日常的な場でありながら地域住民が一丸となる伝統祭礼が、地域の人間関係の質や受け入れの姿勢を端的に示す機会であることに着目する。そこで、伝統祭礼の運営方針を「継承」から「つなぐ」(ここでいう「つなぐ」とは、伝統重視ではなく祭りを続けていくことに重きを置くことをいう)という戦略へと柔軟に転換することが、地域社会の包摂性に与える影響について事例分析を通じて考察する。

1.3 研究目的

本研究の目的は、伝統祭礼の継承戦略が地域社会の包摂性に与える影響を明らかにすることである。特に、祭礼の柔軟な運営が、移住定住を促進する「寛容な雰囲気」がどのように醸成されているかを解明する。以上の問題意識に基づき、過疎地域の伝統祭礼は、柔軟な運営(「つなぐ」戦略)を通じて地域社会の開かれた姿勢と交流の機会を

提供し、移住検討者の心理的不安を段階的に解消する。本研究では、この一連の過程が移住定住を間接的に促進する重要な環境要因として機能するという論証を主要な論点として提示する。

1.4 研究対象と方法

本研究では、過疎化が進みつつも移住者の受け入れに積極的である京都府京丹波町竹野地区を事例とする。葛城神社曳山巡行の継承・保存活動を研究対象とし、運営に携わる保存委員会顧問へのインタビュー調査、および竹野地区への移住定住者複数名に対するヒアリング調査を中心としたフィールドワークを実施した。

2. 調査対象

2.1 葛城神社の曳山巡行について

葛城神社曳山巡行は約130年にわたり受け継がれてきた伝統行事であり、京丹波町の無形民俗文化財に指定されている。しかし、近年は顕著な担い手不足により存続が危惧されていたため、地域住民が「葛城神社曳山保存委員会」を設立し、祭礼継続に向けた取り組みを開始した。

2.2 竹野地区について

竹野地区は京都府中部に位置する京丹波町に属する地域である。人口は742人と小規模だが、府内でも移住者の受け入れが進んでいる地域として知られる。人口は平成22年度の963人以降減少傾向にあり、令和6年度時点では742人となっている。一方で、平成28年以降は毎年移住者を受け入れており、9年間で移住者は97名に上る。

3. 研究結果

曳山巡行は令和6年度には少子化の影響で乗子の確保が困難となり、本来6人乗れるはずの神輿に2人しか乗っていないといった危機的な状況に直面し、欠員のままでの巡行が避けられなかった。こうした中、竹野から離れた外孫等の他出子にも神輿に乗る対象を拡大した。これは祭りのために

帰省する他出子の増加に繋がり、地域は賑わいを取り戻した。祭りを実施すれば地域のほぼ全員が参加する他、地域外に出ていた人々が一時的に帰省するきっかけにもなる。祭りは地域住民が集う数少ない場であり、地域の結束を強める役割がある。

移住者K氏によると、住民からの自然な誘いがあったが、実際に参加してみると地域への安心感や親近感が生まれ、次年度以降、主体的に祭りの準備や運営を行うようになった。また、京都府立大学生12人が実際に祭りに参加し、6地区の地域住民、移住者へのヒアリング調査を行ったところ、移住者に関すること以外にも、神輿を途中まで台車に乗せて運ぶようにすることで高齢化や人手不足に対応するなど、「つなぐ」スタイルに対して地域全体が積極的な姿勢をとっていた。加えて、竹野に移住する人たちの大半は地域のつながりを魅力に感じている人が多いため、祭りにも積極的に参加する傾向にある。参加した京都府立大学生たちも、大半が地域住民の温かさを感じ、次回への参加に意欲的だった。6地区ごとに直会が行われ、各地区での信頼関係や機運の醸成が行わる。その上で、祭りは曳山を巡行させて葛城神社で結集し、竹野地区の機運を一つにまとめている。

4. 考察

ヒアリング調査の結果、竹野地区の祭りは、地域住民の貴重な交流機会であり、協働作業を通じて信頼関係と地域の結束力を高める欠かせない存在である。この結束力が、地域の魅力である暖かい受け入れの雰囲気を醸成している。さらに、祭りの運営を「つなぐ」スタイルへ柔軟に変化させたことで、参加者層を広げ地域内で活発な交流を生み出し、新規参加者も受け入れた。この伝統の柔軟な変容が、結果的に移住定住に繋がるような魅力と迎え入れる雰囲気を創出したと結論づけられる。

5. 政策提言

考察により、竹野地区の成功は、伝統を柔軟に変えて祭りを存続させ、地域の結束感と移住定住の機運を生んだ点にある。特に保存委員会がこの柔軟な役割を担った。

この成功を他地域で再現するため、祭りを通じた移住促進策として、各地域の保存委員会に、外部の人が参加しやすい環境を整備することを政策提言とする。①必要に応じて祭りを「つなぐ」スタイルへと変更すること、②移住希望者への交通手段の提供や地域の人との橋渡しの役割を担うこ

と、の2点を提言する。

祭りを観光ではなく「心理的障壁を下げるイベント」と位置づけ、外部からでも参加しやすい環境を整備することで、移住定住の後押しとなる仕組みを確立させる。

6. おわりに

本論文では、伝統祭礼を存続させるための工夫が移住定住の促進に繋がることを仮説とし研究を進めた。人が集まる工夫によって存続してきた祭りが、地域の交流の核となり、それによって醸成される雰囲気や結束感が移住定住に繋がっていることを明らかにした。

政策提言では、移住者増加を目標とし、保存委員会に、祭りを通じて移住希望者と地域を繋ぐための環境整備の実施を提案した。

それぞれの地域で特色を生かした政策が作られることを期待する。

参考文献

(1) 総務省. (2025/03/23) 「地方への人の流れの創出」に向けた効果的移住定住推進施策 事例集」. (参照日:2025/10/20)

https://www.soumu.go.jp/main_content/000742996.pdf

(2) 内閣府地方創生推進事務局. (2025/07/01). 「令和6年度 関係人口創出・拡大のための対流促進事業（中間支援組織の提案型モデル事業）」. (参照日:2025/10/20)

https://www.chisou.go.jp/sousei/about/kankei/pdf/r6_06_ehimesaijo.pdf

(3) 森島明日香. 金度源. 大窪健之. (2023). 「祭りの行程への参加と地域愛着・世代間交流との関係性 - 岐阜県飛騨市古川町の古川祭を対象として - 」. (参照日:2025/10/20)

https://www.jstage.jst.go.jp/article/journalcpij/58/3/58_632/_pdf/-char/ja